

5. 株式会社エルダーテイメント・ジャパン

(1) 事業所概要

法人名	株式会社エルダーテイメント・ジャパン
介護部門	リハビリスタジオていーだ
所在地	千葉県千葉市美浜区真砂 5-2-3
設立	平成 20 年 10 月 10 日
事業	デイサービス ・ 居宅介護支援 ・ 保育所
従業員数	148名 (2020年3月現在)

(2) 取り組み

1) 過去の実績

リハビリスタジオていーだ (以下、ていーだ) では、「旅行に行けるカラダをつくる」をコンセプトに、10年前の開設当時より、毎年2回から3回の旅行を実施している。例年、「日帰り旅行」1回、「温泉1泊2日」1回、「遠方もしくは海外旅行」を実施している。日帰り旅行のケースでは、100名を超える団体旅行 (最大160名) となっており、希望者が多く、抽選を行うこともある。

(図表Ⅳ-5-1) 過去の実績

実施頻度	例年3回程度 (複数拠点合同で実施)	
参加者平均介護度	要介護 1.2	
参加規模と職員比率	20名~110名 (参加者: 介助者=8:1)	
旅行先	日帰り	潮来・大洗・台場・東京・横浜・鎌倉 など
	1泊2日	熱海・鬼怒川・鴨川・山梨・西伊豆 など
	遠方	台湾・沖縄

旅行先で必要な動作を目標 (旅館ではベッドではなく布団で寝起きできるようにするなど) に設定して、旅行前から動作訓練を繰り返していく。

旅先ではリハビリ効果を実感する利用者も多く、普段以上の笑顔が溢れている。旅行に行けるようになるためのリハビリを計画的に実施することで、達成した際の利用者からの喜びの声、スタッフのモチベーションアップにもつながっている。

(図表Ⅳ-5-2) 旅行中の様子



2) 準備から当日までの流れ

法人内に「旅行介助士」資格者が20名以上いる。旅行の企画から当日までには、旅行介助士の中から、その回の旅行担当を任命し、旅行業者や観光業者と連携して、(図表Ⅳ-5-3)の流れで準備を行っている。

特に、旅行当日が近づくにつれて利用者の不安も大きくなる。ちょっとした体調の変化や、周りの声かけで諦めてしまう方もいる。そのため、パンフレットや行程表などを活用し、利用者の不安感を解消しながら、且つ、旅行への期待感を膨らませられるように、スタッフからも積極的に声かけをしていく。

(図表Ⅳ-5-3) 準備から当日までの流れ

大項目	時期	内容
旅行先の決定	約3ヶ月前	スタッフが旅先の候補をいくつか抽出。利用者へのアンケート結果や、スタッフからの要望をもとに旅行先を決定。
目標の設定		利用者の旅先での目標をヒアリングし、リハビリ計画に反映。
下見	2~3ヶ月前	段差や、移動距離、トイレ形式、ベンチなどの休憩ポイントなどを確認。また、宿泊先では、風呂場の様子や着衣介助の是非を確認する。

パンフレット	2ヶ月前	旅行のイメージが湧くように、パンフレットなどを用意。旅行までの期待感やモチベーションを維持し、旅行に対する不安軽減サポート。
情報収集		利用者の既往歴や身心状況の情報収集、禁忌事項などのリスク把握と共有を行う。
スタッフミーティング	下見後～当日	各種情報を整理し、見守り方の配置など集合から解散までの流れを詳細にシミュレーションする。

3) 準備物

旅行当日には、(図表Ⅳ-5-4)の準備物を必ず持参している。もしもの時の「緊急時グッズ」や「保険証」など、介護事業者の必需品に加え、移動時や集合時に役立つ「ロゴ入りの旗」など、団体旅行ならではの準備物がある。

(図表Ⅳ-5-4) 旅行当日の準備物

準備物	用途
旅行のしおり	・ 参加者に配布している。
スタッフオペレーションシート	・ 行程ごとのスタッフの役割分担を整理したもの。旅行中はスタッフ全員が携帯し、常時内容を確認している。
基本情報シート	・ 参加者の基本疾患やアレルギー等の禁忌情報を記載
携帯・インカム	・ インカムやスマホでのグループチャットを活用し、随時、スタッフ間で情報共有をしている
カメラ	・ 後日、参加者やご家族にフォトアルバムとして製本した物を渡している。
法人ロゴ入り旗	・ 人が多い場所でも見失わないよう、移動時や集合時に使用している。
マスキングテープ	・ 目標となるように貼れるし、すぐに剥がせる。
サインペン	・ お土産など誰の購入物なのか判るようにマスキングテープと合わせてすぐに記入できる
緊急時グッズ	<ul style="list-style-type: none"> ・ トイレが間に合わない場合を想定して、リハビリパンツ、衣類一式、簡易トイレを準備している。 ・ 旅行中、嘔吐した場合の対策として、感染嘔吐用消毒、マスクを準備している。

4) 実施のポイント

要介護高齢者の旅行実施の際には、事前に把握したバリアフリー環境などをもとに、見守り・介助量の予測をし、スタッフ配置を決めておくことが重要である。より安全で、安心できる旅行にするために、(図表Ⅳ-5-5)のように「介助面の配慮」「円滑な進行」「フィードバック」のポイントを意識して、対応している。

(図表Ⅳ-5-5) 実施のポイント

<p>介助面の配慮</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 参加者の体調確認 • 介助必要量の事前把握と看護師付き添いのもとバイタル確認を定期的に行っている。 • 転倒のリスクの確認と対応(段差の確認、注意喚起をする。また、転倒リスクが高まる場所ではスタッフ配置を多くし介助・見守りを手厚くする)
<p>旅行会社との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 旅行会社は、各所のバリアフリーについて、正しい情報を持っているわけではない • プランニングに関しても、高齢者の移動スピードに配慮されているとは言えない。(高齢者の移動には、通常の倍程度の時間が必要。余裕のあるコース設定が大事) • しかし、あまりに細かくオーダーをすると(過剰な依頼をすると)旅行会社や宿泊先、交通機関で対応できなくなってしまう。 • 介護事業者(旅行者)のニーズと、旅行会社、観光各社の対応力の接点を探すために、協力関係を築くことが極めて重要である。
<p>フィードバック</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 旅行中には、想定外のこと必ず起こる。状況に合わせて、役割を替わりながら、助け合うことが不可。 • そうした「想定外」を情報として記録し、その経験をノウハウとして蓄積して、旅行の質を上げていく。

(3) 利用者へのヒアリング

旅行の参加動機や、参加者のニーズを探るため、6名の利用者を対象に（図表IV-5-7）の質問内容でヒアリング調査を行った。

（図表IV-5-6）ヒアリング対象者の概要

	年齢・性別	介護度	歩行状態
i	84歳・女性	要支援2	自立
ii	87歳・女性	要介護1	歩行器
iii	82歳・男性	要介護1	自立
iv	88歳・女性	要介護1	自立
v	80歳・女性	要介護1	自立
vi	84歳・女性	要介護2	杖

(図表Ⅳ-5-7) 回答結果

Q1	ていーだ 以外で旅行・観光に行くことはありますか？	
	i	・普段はしない
	ii	・行っていない。
	iii	・家族とたまに旅行している。
	iv	・行かない
	v	・家族と年に1度
	vi	・ていーだ旅行のみで、していない。
Q2	参加した理由を教えてください。	
	i	・家族に勧められて
	ii	・スタッフ同行で安心なのが1番の理由。毎回参加したい。
	iii	・場所が行きたいところだった。他利用者と一緒に行けるところ。 ・知っているスタッフが同行してくれること。
	iv	・他の人と一緒に行きたいと思った。
	v	・車いすがあること。お世話をしてくれる方がいること。 ・他の方と旅行に行くことで家族が助かるから。
	vi	・日帰りは行きやすいから
Q3	ていーだ の旅行で、よかったサポートは何ですか？	
	i	・すべてよかった
	ii	・トイレの付き添い ・歩行器での歩行で足が出辛く思った時に車いすの声かけをしてくれたこと
	iii	・歩行の見守り
	iv	・スタッフの旅行中の説明がどのタイミングで手洗いがあるかなど適度に教えてくれるので、安心して旅行できた。
	v	・車いすを用意してくれているので、いつでも安心して声かけられる。買い物の手伝いをしてくれる。禁食禁忌事項を把握して配慮してくれる。
	vi	・スタッフが皆優しく旅行の全ての行程で気にかけてくれた
Q4	旅行中、不便に感じたことはありましたか？	
	i	ない
	ii	ない・スタッフが気遣ってくれて本当にありがたい
	iii	ない
	iv	特に感じたことはない
	v	ない
	vi	特にない

(4) 総評

1) 実態調査・ヒアリング要点

	課題に感じていること	解決の方向性
物的支援	<ul style="list-style-type: none">観光地、宿泊先では「バリア」はつきもの。どんなにバリアフリー化しても、100%はありえない。	<ul style="list-style-type: none">バリアを超えるためには、それぞれの高齢者の身体状況、体力に合わせた介助、サポートが不可欠。
情報共有	<ul style="list-style-type: none">インターネット上でも、バリアフリー情報が不足している下見をしても、当日の天候や混雑状況で、状態が変わる。	<ul style="list-style-type: none">介助だけでなく、ある程度、旅行に関する知識を持っている人材の方が、同行者としてはふさわしい。
人的支援	<ul style="list-style-type: none">1対1の介助を前提にすると、1人の要介護者が2人分の旅行代金と同行料(介助料)を払わなくてはならない	<ul style="list-style-type: none">介護施設主催の団体旅行であれば、サポートするスタッフを1対1より少ない人数にすることが可能。現地(交通機関、宿泊先、観光地、食事処)の協力を得ることで、さらに同行者を減らすことはできる。

2) 検討会のまとめ

一度に160名もの参加者を募って旅行を実施している。希望者が多く、抽選になることもあるとのことである。利用者アンケートにあるように、その多くは「普段は、旅行に行かない」と回答している。これは、要介護高齢者の旅行には、介護事業者の存在は大きいということを証明している。

また、旅行会社、交通、観光事業者は、前述のⅡ章の調査で一部示すように、要介護高齢者に対応することは、一般旅行者以上の負担と手間をかけている。そのため、あまりに過剰な依頼をすると、現有の設備、備品、人材による対応が難しくなる。彼らに対応できる範囲の依頼にとどめ、不足するサポートを補うという点でも、介護事業者による関わりは重要である。

さらに、個人旅行では、サポーターは1対1にならざるを得ず、旅行代金、介助料などの高額なコストを負担せねばならないが、介護施設主催の団体旅行であれば、軽度から重度まで幅広い方々が参加するため、中にはちょっとした見守りだけで十分な旅行者もいる。団体旅行であれば、仲間の存在もある。要介護高齢者の不安感を解消し、旅行への第一歩を踏み出す上でも、ハードルの低い(コストも低い)団体旅行は有効であると言える。